

多喜二とロマン・ロラン

— 伝説の〈事実〉と〈真実〉 —

高 橋 純

日本のプロレタリア作家小林多喜二は、1933年（昭和8年）2月20日に、特高警察により築地警察署内で拷問・虐殺された。この事実は同年3月14日のフランス共産党機関紙「ユマニテ」第3面に多喜二追悼記事としてフランスで報じられた。この記事は、小樽商科大学「言語センター広報」第17号（2009年1月）に発表されているが、以下の検証について非常に重要な手がかりを提供するものであるため、再度ここに掲載する。（図版1）

「ユマニテ」1933年3月14日第3面

その反戦活動のゆえに！（Pour son action contre la guerre !）
革命作家小林（KOBAYASCHI）日本軍国主義の手により東京にて
殺害さる

小林多喜二が東京で殺害された！…

この犯罪の噂はわずか数日前にフランスにも伝わってきていた。

このニュースは — 記憶に新しいところだが¹ — A. E. A. R.（革命的作家芸術家協会）の猛烈な非難を呼び、ロマン・ロランの呼びかけに応じてこの犯罪に対する無数の抗議の声が湧き起こったのだった。

いまやこのニュースは確証された事実である！

小林！… その名は世界を駆け巡った！

帝国主義戦争への反対闘争を熱烈に支持するすべての者から彼は

認められ、愛されていた。

小林は若かった。1903年に北日本の小村に生まれ、非常に若くして社会問題に関心を寄せ、ほどなくして革命的知識人および労働者の前衛として戦うようになった。

彼は共産党機関誌と協働し、「戦旗」には、日本共産党の闘争を描いた『1928年3月15日』、次いで『蟹工船』や、農民ストを語る『不在地主』といった傑作をつぎつぎに発表したのだった。彼は続いて他の作品も発表したが、そのいずれもが労働者階級とわれらが共産党の闘争にささげられたものだった。彼は革命的作家中央委員会メンバーであった。

警察の手で殺害

過去数ヶ月間に彼は決然として、極東における帝国主義的略奪戦争および反革命戦争に抗する運動の先頭に立ち続けていたのだった。

彼の不屈の革命的活動は日本帝国主義の脅威となっていた。

われらが同志は威嚇にも脅迫にもひるむことなく、その立ち位置を変えることはなかった。

去る2月20日、小林は「反軍国主義活動」の廉で逮捕された。

その1時間後、彼は警察署で死体となっていた！ 小林は殺されたのだ！

全世界のプロレタリアは日本軍国主義のこの新たなる犯罪に対して結束して立ち上がる。この犯罪は、日本の人民大衆の戦いの意志を掻き立てずにはいないのである。

この記事の発掘のきっかけとなったのは、多喜二死亡の当時フランス在住であった彫刻家高田博厚(1900-1987)の証言である。高田は日刊新聞「^{あかはた}赤旗」のインタビューに応じて語っている(1974年2月20日)。当時、多喜二虐殺

を告げる「無産者新聞」を日本から受け取り、その内容をロマン・ロランに伝えたところ、ロマン・ロランが抗議文を書き、それが「ユマニテ」に掲載された、ということであった。(図版2)

しかしながらこの記事はいまだに発見されてはいないのである。ロマン・ロランが多喜二を追悼する抗議文を書いたという「伝説」はこうして生まれたと思われる。本論ではこの伝説の真相を究明したい。この伝説の真偽を明かすことは、小林多喜二研究にとっても、ロマン・ロラン研究にとっても重要であるばかりでなく、さらには日仏現代史上の重要な証人である高田博厚という傑出した知性の名誉にもかかわる意味をもつものと信じられるからである。

* * * * *

高田博厚は、^{あかはた}「赤旗」のインタビューに応えた同年に雑誌『世界』に15回わたってフランス滞在時の回想録を連載し、後にこれを『分水嶺』という一著にまとめており、ここにも多喜二とロマン・ロランをめぐる記述が残されている。関係箇所を引用する²。

私は思いがけぬ機会に会って、間もなくイタリア巡礼に出た。そしてこの年の夏にクラマールに移り、十一月にはスイスのロマン・ロランの家に、ガンジーに会いにでかけた。この期間のいつ頃だったかは覚えていないが、ある日日本から嚴重な封をした郵便小包が届いた。開けてみると『無産者新聞』で、小林多喜二が拷問獄死した追悼の特別号である。遺骸を囲んだ「同志」たちの大きな写真が載っている。これをフランスの同志たちに伝えてほしい。抗議の文を『ユマニテ』紙に出してほしいと手紙が添えてあった。

私はその新聞を持ったまま、市街電車に乗り、座席で広げて読んでいた。日本語だから誰にもわかりっこない……ふと眼をあげると、私の前

「ロマン・ロランも抗議文…」

多喜二虚殺から41年

当時パリ滞在の高田氏語る



二、關於我國著名經濟學家、片斷
集作者王德人給王德志的信(二〇〇

「その時、ロビンソンは二匹を捕まえて、その肉を食料として食べた。そして、その皮を履き、その骨を武器として使った。」



小林多喜二

[illegible]

ロアンが「高マニヤ」前に
夢見二連歌の初編文を書いた
経緯を語ると、高田 博 孝 氏
(『夢見の文化』)

[illegible][illegible][illegible][illegible]

につり革にぶらさがって日本人が立っており、びっくりしたような顔で私を見ている。間もなく後に知り合ったのだが、これが嬉野満州雄だった。「パリに着いたばかりで、電車に乗ったら、『無産者新聞』を読んでいる奴がいる。あんなにおどろいたことはなかった」

『ユマニテ』紙に抗議文を出すのにどうしようか？ 共産党首のマルセル・カシャンと親しい画家のポール・シニャックが私を大事にしてくれているので、まず彼に相談した。「それはぜひ出さなければいかん！」と彼の方が大乗気だが、私の名は出せない。「まず、スイスのおやじさんに相談してみろ」。私はロランに書いた。即座に返事が来て、「私が全責任を負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」。私は新聞の記事の大意をフランス語で書いて、新聞といっしょに彼の許に送った。『ユマニテ』紙は全面をあげて、ロランの抗議文と小林の遺骸の写真を転載した。(小林の死を一九三二年のように思っていたが、一九三三年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はすでになく、『赤旗』^{せっき}に変わっていたという。) (74-75 ページ)³

この証言を手掛かりとして多喜二の死 (1933 年 2 月 20 日) から 1935 年 8 月 15 日 (ポール・シニャックの命日である)⁴ までの「ユマニテ」を精査しても該当する記事は見当たらない。1935 年 8 月 15 日という日付で区切ったのは、高田の記述を信頼するならば、彼の相談相手となったポール・シニャックの生前の話に違いないからである。該当するような記事が見つからない代わりに、本論冒頭に掲げた 1933 年 3 月 14 日付けの多喜二追悼記事が発見された。この記事は、多喜二の出生にまで触れており、この当時のフランス人記者の手になるものとは信じがたいほど詳細正確なものであるが、ロマン・ロランが書いたものではないことは明らかである。では、高田の証言にある問題の記事は実際に存在するのかわからないのか。存在するとしたら、どのようなかたちでどこに潜んでいるのか。1933 年 2 月 20 日から 1935 年 8 月 15 日

までの「ユマニテ」を精査した結果として、そもそもそのような記事は存在しないのだと判断するとしたら、高田の証言は虚言であると断定するに等しい。それは正しいだろうか。『分水嶺』からの上記の引用について言うならば、雑誌掲載時に記憶の誤りを指摘されていたにも関わらず、単行本化の際にわざわざ自分の記憶違いを認めながらも最初の記述を削除も修正もしなかったことには、むしろ高田という人物の誠実さ、潔さ、そして何よりも自らの体験に対する強いこだわりを感じることができる。ここには、事実と記憶の間のずれがあるにもかかわらず、その向こうに何らかの真実が隠されていると見るべきであろう。

そこで高田の記述をさらに検討してみる。

高田は1931年2月に靖国丸に乗って日本を発ち、「3月某日」（当時は約40日を要した）にマルセイユに到着した。パリで、先にフランス滞在していて間もなく帰国することになっている片山敏彦と落ち合い、ほどなくして片山に伴われてスイスのロマン・ロランを訪ねる。その直後にはロマン・ロランから胸像製作を依頼されるなど深い信頼関係が築かれ、同年11月にマハトマ・ガンジーがスイスにロマン・ロランを訪問した際には、パリからは高田のみがロランに招かれて、ガンジーの肖像デッサンなども描いた。つまり上記引用には1931年の出来事と折り重なるようにして1933年の多喜二の死が語られていることになる。

さらに後日の単行本化の際の書き込みに、「小林の死を一九三二年のように思っていたが、一九三三年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はすでになく、『^{せっき}赤旗』に変わっていたという」というくだりについて言うならば、本文中には高田は多喜二の死を1932年と（思い違いして）特定するような記述をしていないのである。つまり高田が多喜二の死を1932年と思い違いしていたことをわからせる記述がほかにあることになる。それが、嬉野満州雄との遭遇である。「パリに來たばかりの」嬉野との遭遇は、両者に強い印象となって記憶されたはずである。そしてその嬉野がパリにやってきたのは実は1932年だった。加藤哲郎氏の『ベルリン反帝グループと

『新明正道日記』の1節にこうある。

他の名前も解読は難しいが、私はここでの「内田君」を、画家の内田巖、「佐藤君」を（「佐野氏」「佐瀬君」と同一人物でないとすれば）、佐藤敬と推定する。二人とも、翌32年1月のパリ・ガスブ結成メンバーである。この頃には、坂倉準三・大岩誠・嬉野満州雄らがパリに着いており、パリの日本人左翼は、ナップやプロ科など日本の組織ばかりでなく、反帝同盟やモップル(国際赤色救援会)、周恩来のつくった在欧中国人共産主義者ネットワーク(小倉和夫『パリの周恩来』中公叢書、1992年)を通じて、ベルリンとつながっていた。当然、ベルリン反帝グループとも連絡があっただろう。⁵

つまり、高田と嬉野の遭遇というエピソードが、嬉野のパリ到来直後に間違いないとすると、その時に高田が読んでいた新聞は多喜二存命中のものであったことになるのである。この驚愕すべき食い違いの存在にも関わらず、回想の当該部分の記述をそのままに残した高田の胸中には、当時彼が何事かをロマン・ロランに依頼し、その依頼がかなえられたという記憶だけは確固としてあったのであろう。そう信じられればこそ、わずかとはいえ残された手がかりを徹底的に検証する意味がある。

* * * * *

再度冒頭に引用した「ユマニテ」の多喜二追悼記事に戻る。「言語センター広報」にこの記事を単独で掲載した時にも指摘しておいたことだが、多喜二の死が2月20日であり、この新聞記事が3月14日のものであるとすると、「この犯罪の噂はわずか数日前にフランスにも伝わってきていた」のであるから、このニュースがフランスに伝わったのは多喜二の死の「直後」ともいえないようである。他方、「ロマン・ロランの呼びかけに応じてこの犯罪に対す

る無数の抗議の声が湧き起こった」のは、多喜二の死の事実が伝わってからこの新聞記事が出るまでの間であると考えるのが妥当であろうが、そうするとその間の時間的隔たりがかなり短いことになる。いずれにしても、この「ロマン・ロランの呼びかけ」というのは、高田の証言に述べられている「ユマニテ」の記事とは別物と考えるべきだろう。

ここで注目されるのが A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) の存在である⁶。この時点では、活動の記録として期待されるこの協会の機関誌はまだ立ち上がっていない。しかしながら、「このニュースは——記憶に新しいところだが——A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) の猛烈な非難を呼び、ロマン・ロランの呼びかけに応じてこの犯罪に対する無数の抗議の声が湧き起こったのだった」という記述は、この時に A. E. A. R. の活動が明確に存在し、ロマン・ロランが何らかの呼びかけを行い、それに応じるようにして多喜二虐殺に対する抗議の声が上がり、新聞記事の記述の中に——*on s'en souvient*——(記憶に新しい)と表現されているように、読者一般人の目に触れ得るようなかたちでどこかに痕跡を印していることが期待されるのである。そしてその証拠は以下のようなかたちで発見することができた。それは「ユマニテ」1933年3月6日版第2面である。(図版3)

紙面中に「労働者のデモ、作家たちの抗議」と題する記事がある。これはヒトラーが政権を取ってしまったナチス・ドイツに抗議してドイツ・プロレタリアとの連帯を強化せんとするフランス各地の運動を報じるものである。その中に、「知識人の抗議」という小見出しの次に、「以下に革命的作家芸術家協会の *Feuille Rouge* ^{フィユールージュ}に取り上げられた作家たちの抗議の抜粋を紹介する云々」というコメントがあり、その後アンドレ・ジッド、ロマン・ロラン、ジャン＝リシャール・ブロック、アンリ・バルビュスによる抗議文の1節が掲げられている⁷。3月14日の「ユマニテ」の多喜二追悼記事から推測される、A. E. A. R. の活動とつながるところから発せられたロマン・ロランの「呼びかけ」というのが抗議の概文であろうことは疑いないだろう。そこでこの *Feuille Rouge* 第1号を参照してみる。(図版4)

紙面中央にロマン・ロランのアピールが掲載されている。その全文は以下のとおりである。

Feuille Rouge 第 1 号第 1 面

ロマン・ロラン

褐色ペスト⁸は一挙に黒色ペスト⁹を凌駕してしまった。ヒトラーのファシズムはわずか4週間の間に、その師とも範とも仰いだイタリアファシズムが過去10年間に振るった卑劣な暴力を凌ぐ暴虐を恣にしたのだ。彼らは先の国会議事堂炎上¹⁰を稚拙にもおのれの暴虐の正当化のために利用せんと謀っているが、これこそ警察の手による下劣な挑発行為だったのであり、ヨーロッパ人の誰一人としてこれに欺かれはしない。我々はここに彼らの犯した侵害と虚偽を世論の前に暴きだす、——彼らは暴力的な一反動政党にすべての公の武力を掌握させてしまった、——彼らの政府は殺人に行き着く犯罪行為まで合法化してしまった、——彼らは言論と思想の自由をことごとく扼殺してしまった、——彼らは傲然とアカデミーの世界にまで政治介入し、自説を枉げぬ勇気を示した稀有な作家芸術家を追放してしまった、——彼らは革命政党のみならず社会主義者やブルジョワ自由主義者の中からさえ、人望ある人々を逮捕してしまった、——彼らはドイツ全土を戒厳令下に置いてしまった、——彼らはあらゆる現代文明の礎である基本的自由および権利を停止させてしまったのである。我々は訴える、人および市民の尊厳を陵辱する卑劣な犯罪行為への怒りと、そして、こうした臆面も歯止めもない犯罪に走るテロリズムと戦う者を結束させる連帯の意志とを我々と分かち合うかぎり、いかなる党派に属そうとも、ヨーロッパもアメリカも問わず、すべての作家、すべての世論の代弁者が、我々の抗議の声に唱和せんことを。(下線は引用者)

1933年3月2日

この *Feuille Rouge* は A. E. A. R. がナチス・ドイツのテロと戦い、ヴェルサイユ条約を非難する目的で出されたものであり、ロマン・ロランの檄文も隣国の直近の事件を取り上げてアクチュアルな抗議文となっているが、下線部に注目するならば、さらに広い文脈でこれを反ファシズム、反帝国主義戦争の戦いへの「呼びかけ」として受け取ることができるように思われる。そのような理解が許されるのならば、この呼びかけに応ずるかたちで多喜二に関わる情報が浮かんでくることが期待できることになる。そしてその期待には *Feuille Rouge* 第2号が応えていたのだった。(図版5)

(図版5)の複写紙面は *Feuille Rouge* 第2号の2面である。発行日はやはり記されていないが、「ユマニテ」1933年3月8日版第2面に、非常に小さな記事だが、近接過去形で、「*Feuille Rouge* 新号」が発行されたことが報じられていることから、同日（もしくは前日）のことだと考えられる。これは、1933年3月14日の「ユマニテ」の多喜二追悼記事が出る6日（もしくは7日）前の出来事である。紙面右側中段に、小林のローマ字綴りに誤りがあるが、まさしく小林多喜二殺害を報じる記事を読むことができる。その内容は以下のとおりである。

Feuille Rouge 第2号第2面

小林殺害に抗議する！

小林多喜二が警察の手によって東京で殺害された。

小林多喜二は、昨年、コップ（日本プロレタリア文化連盟）の解体¹¹に対する抗議集会において朗読され、A. E. A. R.（革命的作家芸術家協会）の同士等からその偉大な才能を高く評価されたプロレタリア作家その人である。

彼が殺されたのは、日本が中国に仕掛けるおぞましい侵略戦争に

Elie Faure :

Il faut que notre protestation contre les actes ignobles des aventuriers hiliérans frappe en même temps qu'eux les Versaillais — je veux dire les auteurs du traité de Versailles — qui ont créé en Allemagne et dans le monde un état d'anarchie, de misère et de désespoir peut-être sans précédent. C'est nous, République française, et nous, démocrates anglo-saxons, qui avons fourni aux banquiers, hobereaux, industriels et politiciens d'outre-Rhin tous les prétextes qu'ils cherchaient pour retourner contre nous et le peuple allemand, le fer empoisonné que nous avions

Paul Signac :

Je me joins à vous de tout cœur pour protester contre tant d'horreur, contre cet abominable recrudescence de l'humanité. Mais on a honte de n'employer que des mots pour combattre ces indignités.

Eugène Dabit :

Les événements d'Allemagne ne se prêtent ni à des discours, ni à des poèmes. Chaque jour apporte de nouvelles menaces, de nouveaux drames, des cris de haine et aussi des cris de vraie révolte. Je me joins à mes camarades français : ouvriers, intellectuels, pour protes-

Pacifique (!) L'Italie prépare sa guerre. Les Balkans préparent la guerre. Le monde entier prépare la guerre !

Soulez l'U.R.S.S. prépare l'ordre pacifique dans la paix des peuples associés, purgés des idées assassines et des hypocrisies qui enrichissent les faiseurs d'armes et mènent les peuples au massacre.

Artistes, écrivains, savants, regardez ce qui va se passer en Allemagne et réfléchissez si vous pouvez rester neutres. Refrénons-pous. Agissez. Toutes les idées qui mènent à la guerre sont des idées-cancer. Front unique contre les vieilles idées-cancer !

Alerte !

(Suite)

Le Fascisme détruit tout pour sauver des profits misérables. Il marche contre toute pensée libre contre la pensée qui va de l'avant pour assurer la continuité de la pensée.

Le Fascisme détruit. Ses hurlements de singes n'ont rien de la voix de l'homme. La pauvreté de son discours excitait le rire si la haine ne se proposait devant nous comme notre devoir. Pas, une idée fasciste qui ne soit un lambeau d'idées arraché à de vieilles doctrines en poussière. Les vieux balbutiements de Gobineau ne justifieront aucune régression de la culture. Demain toute la culture spirituelle de l'humanité sera-t-elle réduite à notre plus que la superstition religieuse la plus répugnante, la superstition nationale la plus basse.

Alerte ! C'est la civilisation et l'avenir des hommes qui sont en jeu.

Alerte ! Que les révolutionnaires de la pensée entrent dans le combat des révolutionnaires des usines. Car leur combat est le même combat.

Les ouvriers qui tombent sous les coups meurent aussi pour les laboratoires futurs, pour les musées futurs, pour les penseurs futurs, pour les poètes futurs.

Alerte ! Pour la défense de la renaissance spirituelle qui naît sur les barricades.

Alerte ! Pour la défense des écrivains arrêtés par les policiers d'Hitler, pour Ostieky, pour Gerlach, pour Renn, pour tous ceux qui tomberont demain, qui tombent aujourd'hui dans les prisons, où les révolvers assassinent les porteurs de la culture de l'avenir !

Alerte ! Rejoignez le front des exilés allemands ! Rejoignez le front d'Einstein, de Mann, de Glöckner, de tous ceux qui ont fui l'Allemagne de Hitler et de Marx pour que leur pensée ne soit pas détruite par les grandes et les petites des Mausey !

Alerte ! Rejoignez le front des travailleurs des usines et des travailleurs des livres pour briser la barbarie qui monte en Allemagne et menacera demain en France, pour assurer la transmission de la culture aux hommes de demain, pour arrêter la montée de la nuit !

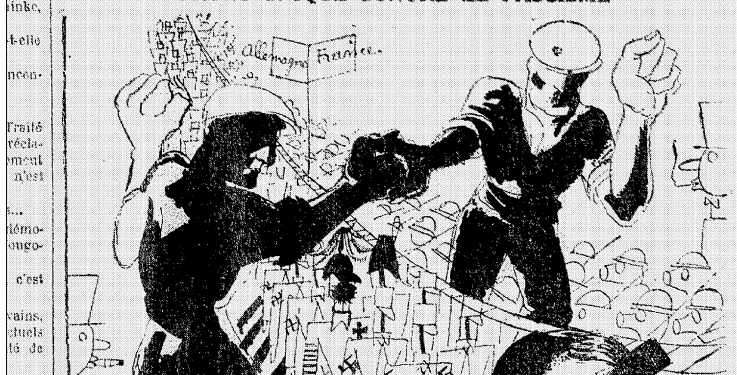
Contre l'assassinat de Kabagashi

Seidshi Kabagashi vient d'être assassiné à Tokio par la police japonaise.

Seidshi Kabagashi était ce jeune écrivain prolétarien dont les amis de l'A.E.A.R. avaient pu apprécier le grand talent au cours des lectures faites dans la soirée organisée l'année dernière contre la dissolution du K.O.F.F.J. le front culturel rouge japonais.

Il a été assassiné parce qu'il luttait contre l'ignoble guerre d'agression du Japon contre la Chine, parce qu'il luttait contre l'un des impérialismes qui préparent l'incendie mondial, contre la bourgeoisie qui vise en premier lieu l'U.R.S.S.

L'A.E.A.R. proteste contre la terreur bestiale que font peser les gouvernements impérialistes sur les masses laborieuses, elle flétrit ces lâches assassinats qui la classe ouvrière vengera un jour collectivement par la Révolution. Elle appelle, pour cette lutte révolutionnaire, les ouvriers et les intellectuels à s'unir et à s'organiser dans un front de combat, contre les gouvernements assassins impérialistes.

FRONT UNIQUE CONTRE LE FASCISME

反対して戦ってきたからであり、世界中に火を放とうとする帝国主義の一員に抗し、ひたすらソ連を目の敵にするブルジョワジーに抗して、戦い続けてきた故になのである。

A. E. A. R. は、帝国主義政府が勤労大衆支配の手段とする獣並みのテロに抗議するとともに、この卑劣極まる殺害を、いつの日か労働者階級が一丸となって「革命」を通じて報復するであろうものとして銘記する。A. E. A. R. は、こうした革命闘争に向けて、労働者と知識人が結集し、帝国主義的殺人集団政府に対抗する戦線を組むべく訴えるものである。¹²

この記事こそは、そしてその前に掲げたロマン・ロランの「呼びかけ」と併せて、3月14日の「ユマニテ」に、「このニュースは——記憶に新しいところだが——A. E. A. R.（革命的作家芸術家協会）の猛烈な非難を呼び、ロマン・ロランの呼びかけに応じてこの犯罪に対する無数の抗議の声が湧き起こったのだった」と書かれる根拠となる事実であろう。多喜二虐殺の報はこのようなたちでフランスに伝えられ、受け止められていたのである。

多喜二の死を悲しみ憤るものはその地にも数多いたのである。

* * * * *

ここから検証は多喜二の生前に遡ることになる。*Feuille Rouge* 第2号の記事が多喜二について「昨年、コップ（日本プロレタリア文化連盟）の解体に対する抗議集会において朗読され、A. E. A. R.（革命的作家芸術家協会）の同志等からその偉大な才能を高く評価されたプロレタリア作家その人である」と述べられているからである。つまり多喜二の死の前年である1932年にA. E. A. R.の活動の中で小林多喜二の名と作品が取りざたされていたことがわかるのである。そしてそれは間違いなく、1932年3月以降、日本でコップに大弾圧が加えられた時よりも後のことと考えられるのである。

こうした推理に従って 1932 年 3 月以降の「ユマニテ」を精査した結果、以下の記事に出会うことができた。1932 年 7 月 19 日版「ユマニテ」第 4 面右下の小さな広告である。(図版 6)

「ユマニテ」1932 年 7 月 19 日第 4 面

A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) 主催による、7 月 20 日水曜日
グラン・トリアン・ホール (カデ街 16 番地) にて 20 時 30 分開催の
「日本の夕べ」をお忘れなく!

* Jean LOUBES¹³ による日本赤色文化戦線に関する講演

* Vaillant-Couturier の挨拶

* F. K. O. F. (フランス・プロレタリア文化同盟) 同志による革命的日本の詩、小説、演劇作品の朗読

* 新聞、絵、挿絵つきピラ等の展示

参加費 5 フラン：A. E. A. R. 会員 3 フラン¹⁴

この集会在催された後にこれについての批評や論評が残されているか否かはわかっていない。また、この集会で展示された日本の新聞や政治ピラが誰の手によっていかにして届けられたかも不明のままである。しかしその場において「日本赤色文化戦線に関する講演」が行われ、「革命的日本の詩、小説、演劇作品の朗読」が行われていたのだとしたならば、この集会在、*Feuille Rouge* 第 2 号に見られる、「昨年、コップ (日本プロレタリア文化連盟) の解体に対する抗議集会において朗読され、A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) の同士等からその偉大な才能を高く評価されたプロレタリア作家その人である」という記述を裏付けるものであると考えることは許されるだろう。

以上で、1933 年 3 月 14 日付け「ユマニテ」第 3 面に掲載された小林多喜二追悼記事の発見を端緒として、その記事の背後に潜む関連情報を多喜二の生前にまで遡及して可能な限り洗い出し、事実関係の検証が正しくできたもの

と考える。この歴史的な記事には、フランスで多喜二虐殺に対する抗議の声
が起きるきっかけとなるある「呼びかけ」を行った人物としてロマン・ロラ
ンの名が現れるが、上記検証したとおり、その「呼びかけ」が実際にロマン・
ロランによる多喜二追悼文であったとは考えられない。そして多喜二の死後
1935年8月15日までの「ユマニテ」には該当するような記事は見つけること
が出来なかった。これをもって、ロマン・ロランの手になる多喜二追悼の記
事が当時の「ユマニテ」に掲載されたという高田の証言は偽りであったとし
なければならないのだろうか。

ここで、わかりきったことではあるが、虚言と記憶の錯誤とははっきり区
別しなければならない。虚言には裏付けとなる事実が伴うことを期待しても
はじまらないが、記憶の錯誤であれば、それが錯誤であることを証する裏付
けの存在が期待できるからである。

高田は、自身の回想録『分水嶺』において、雑誌連載時の記述の中に記憶
違いがあることを承知のうえで敢えて修正を加えなかった。その結果、実際
には1933年の出来事であった多喜二の死の事実を高田は1932年に知ったか
のようになり、その文脈で浮かび出た「ロマン・ロランの追悼文」が発見さ
れないまま今日に至っている。この不可解な事態の原因が虚言によるものと
断ずるならば、検証はここで終わる。しかし記憶錯誤から帰結したものであ
ると考えるならば、その錯誤がどこにあるのかをさらに究明する余地がある。

嬉野満州雄（1907-1993）は高田が『分水嶺』を雑誌連載した時にこれを読
み、記述に記憶の間違いがあると高田に伝えていたことが、単行本化したと
きの高田の加筆からわかるのである。たとえば、嬉野はパリにやってきた後
しばらくして、不良外人として国外追放されてしまうのだが、その理由を高
田が回想録の中で取り違えていたことを嬉野が正してくれたと、加筆の際に
告白している。それに対して、高田が、多喜二虐殺を報じる（と高田が信じ
る）日本の新聞を読んでいた電車内でパリ到着後間もない嬉野と遭遇したエ
ピソードについては、その嬉野から何も指摘されなかったことから、この遭
遇の時日（事実）についての記憶に間違いはなかったと信じられる（ただし

新聞紙名については嬉野にも記憶違いがあったわけだ)。すると記憶違いはその時に読んでいた新聞の中身ということになるだろう。そしてそれが何であったにせよ、高田の記述に従うならば、その新聞の内容は(高田による翻訳を通じて)ロマン・ロランに伝えられ、その後に(つまり日本から発せられた「フランスの同志たちに伝えてほしい」情報が高田、次いでロマン・ロランを経由することによる時間的なインターバルをとって)「ユマニテ」の紙面に現れることになるはずである。その際には、「私が全責任を負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」と語ったロマン・ロランの配慮もあって、高田博厚の名が表に出ることは決してない。さらに、ロマン・ロランの仲介を受けた「ユマニテ」が「全面をあげて」協力をしてくれた結果、(多喜二の遺骸の写真とは異なる)何らかの日本にまつわる写真が併載された記事が、「ユマニテ」紙の(おそらくは)第1面に掲げられることになるだろう。

そしてこの推理が100パーセント当たったことを証明してくれたのが、「ユマニテ」1932年9月29日版第1面の《La terreur blanche au Japon》(日本の白色テロ)と題する記事である。(図版7)この記事は、はじめに事の詳細を説明するコメントがあり、続いてロマン・ロランから共産党首マルセル・カシャン宛ての依頼状、そして1932年7月20日の日付をもつ日本共産党中央委員会のアピールのフランス語訳が掲載されている。このアピールは、確かに日本で同年7月20付けで作成され、『^{せっき}赤旗』1932年7月30日(第87号)に掲載された、「日本に於ける百九十一人の共産主義者の求刑に対して国際プロレタリアート勤労大衆に訴ふ」に間違いないと断定できる¹⁵。(図版7および8)

その紙面に併載された「日本にまつわる写真」は当然ながら多喜二の遺骸ではなかった。その正体は、靖国神社境内に設けられた「遊就館」の建物を背にして整列するフランス軍海兵の写真であった。その写真下の説明には、「フランス帝国主義はおのれの軍隊をして、同盟国日本が満州において達成した略奪行為の経験から学ばせんとしている。上の写真は、東京の戦争博物館



(図版 8) ^{せつき}「赤旗」1932年7月30日 87号第2面

ここに掲載した「日本に於ける191人の共産主義者の求刑に對して國際プロレタリアート勤勞大衆に訴ふ」と題された記事を、1932年9月29日付け「ユマニテ」に載った高田訳の「アピール」を比べると、3倍の長さがある。この違いは、高田が「記事の大意をフランス語で書いて」ロマン・ロランの許に新聞と一緒に送ったという事実を裏付けるものだろう。またこの紙面には写真はない。「ユマニテ」に併載された「遊就館」前にフランス軍海兵が整列した写真は「ユマニテ」編集部で選んだものであるはずだ。

前に整列するフランス軍海兵の一団である」とある。

ここでは、オリジナルの日本共産党中央委の「訴え」を参照せずに、「ユマニテ」紙面のフランス語を尊重して直訳する。

「ユマニテ」1932年9月29日第1面

日本の白色テロ

我々のもとにロマン・ロランから書簡が届いた。以下にこれを、日本共産党の訴えと併せて掲載する。

我々の同志は自国においてこの上なく英雄的な反政府運動を展開しているが、この間の犠牲者は数千の数に上っている。彼らはその活動を非合法で行うしかないゆえに、以下で日付を突き合わせてみれば、活動の裏付けとなる文書資料をこのヨーロッパにまで届けるためにいかに大なる犠牲を払わなければならないかがわかるだろう。

日中戦争開始¹⁶以降、またフランス帝国主義に援護された満州事変以降、我らが同志に向けられる攻撃は非道さを増すばかりである。

ここにおいて西洋プロレタリアートは、その同志たちが果敢な抵抗運動において示す勇氣に胸打たれずにはいられない。先のアムステルダム¹⁷の会議[1932年8月の世界反戦大会]において緊要とされたことがある。それは、すべてのプロレタリアート、なかでも社会主義的勤労大衆を促して、日本の革命的人民との連帯を表明し、東京^{みかど}の帝の同盟者たるこの国の政府を含む彼らの迫害者に圧力をかけることである。

以下がロマン・ロランの手紙である。

親愛なるマルセル・カシャン、

日本から私のもとに知らせが届いています。そこに同封されてい

た日本共産党の訴えをあなたに託しますが、これは党の非合法新聞に掲載されたものです。有罪宣告を受けた不幸な人々を救える可能性は無きに等しい。しかし彼らの仲間たちは世界に向けて、せめてその憤激の叫びを届かせたいと、悲痛な訴えを送ってきているのです。私はあなたならばこの訴えを「ユマニテ」紙上に迎えてくださるものとする次第です。

敬具

ロマン・ロラン

国際プロレタリアートに訴える

全世界の同志、労働者、農民、勤労大衆、プロレタリアの諸君！

さる7月5日、天皇の法廷（軍国ファシズム掌中の傀儡にすぎない）において検事総長は、191名の我らが同志に対し、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑という過酷極まる求刑をした！

この191名は犠牲者のわずか一部にすぎない。1928年以降（すなわち1928年3月15日の大量検挙、1929年4月6日の検挙等）テロ体制の下で繰り返された大量検挙により何年にもわたって投獄されてきた коммуニストの犠牲者は幾万の数に上るのである。この191名は日本の коммуニストの前衛であり、ブルジョワ政府と果敢に闘って日本の労働者、農民、勤労大衆の立場を守り、彼らを新たなソヴィエト政府の建設へと導いてきたのだった。

囚われの同志のなかには、日本共産党の組織の中核を担う者がおり、同じく日本共産党の創設メンバーも含まれている。天皇の法廷は彼らを帝国主義的テロリズムの法で裁かんとしている。これまでに20名が、法定取り調べを受けることもなく、幾年にもわたる投獄のあげく、拷問と栄養失調のために死亡した。6名の同志は拷問の苦痛をこらえきれず発狂し、その他幾名もが病に倒れた。

にもかかわらず、我らが同志は勇敢に法廷での闘いを堪えぬき、

真のコミュニストの闘争心を堅持し続けて、彼らの偉大な戦いは搾取される労働者、農民、勤労大衆に真に自らあるべき姿を自覚させたと同時に帝国主義政府の憎悪も買わずにはいなかったのである。

※

「二千年にも及ぶ神聖不可侵なる帝^{みかど}の国！」実のところそれは日本のプロレタリアとその党に対する暴虐と搾取のための仮面に他ならないのである！

昨年来、労働者のデモ、集会はことごとく妨害され、禁止されてしまった。にもかかわらず、工場労働者や農民たちは常軌を逸した暴虐に抗して幾百の抗議の声を上げ、囚人の解放を求めるデモを組織してきた。さる7月19日には東京で大規模なデモが行われたが、これはただちに禁止され、暴力的な対抗デモが放たれたのである。

同志よ！諸君のもとでも革命的労働者に対するテロと暴虐が見られるであろう。

我らが極東にあっては、中国において、韓国において、台湾においても、白昼堂々革命家に私刑が加えられ、法の裁きもなく殺害されてしまうのである。

だがしかしわれわれはなおも現状に立ち向かうことができるであろう、我らが191名の同志の解放を求める全世界の人民大衆の大いなる運動に支えられ、すべての国のプロレタリアの抗議の声に支えられるならば。われわれは全世界のプロレタリアに訴える、我が国の帝国主義の犠牲者の解放を願う諸君の力強い支援を求め、待ち望んでいる！

我々は、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑を宣告された191名の日本コミュニストの解放を要求する！

我々は、白色テロに抗議する！

我々は、中国におけるソヴィエト革命の防衛支持を表明する！

我々は、日本による満州植民地化に反対する。

我々は、日本陸海軍の中国からの即時撤退を求める。

我々は、帝国主義戦争反対を言明する！

1932年7月20日¹⁷

日本共産党中央委員会

1932年のある日、パリの電車で嬉野満州雄と遭遇した時に高田が読んでいた新聞とはまさにこの「赤旗」第87号だったのだ。そしてそこに掲載されている日本共産党中央委の訴えは高田の仏訳を経てロマン・ロランに託され、新聞発行から約2カ月後の9月29日の「ユマニテ」第1面に出現することになったのである。高田は1974年の「赤旗」のインタビューで、この新聞の日本からの送り主は今もってわかっていないと述べている。しかしともかく、依頼に応えるべく努力した高田の働きで、その「誰か」の願いは間違いなく叶えられたのだった。

ここまで事実の残された痕跡をたどってきたところで、高田の中での記憶の錯誤について思いが及ぶ。なぜ後年高田は、この1932年9月29日の「ユマニテ」の記事の内容を、現実には1933年2月に起きた多喜二虐殺事件と混同するに至ったのだろうか。もしも日本からの「赤旗」87号の送り主がわかっていたら、後日高田が依頼成就の報告などすることによって、高田以外の人間の記憶に留まるチャンスもありえただろう。しかしその送り主は、自分が非合法新聞を発送したことを当局に嗅ぎつけられる危険を恐れてか、自分の名を記さなかったために、高田のとった行動はもはや高田一人の記憶の中にしか残されなかった。他方、この「赤旗」87号が高田のもとに届けられたのであれば、翌年の多喜二虐殺を報じた「赤旗」122号¹⁸を後日高田が目にしたであろうことは十分すぎるほど可能性がある。

この時代、ファシズムと軍国主義が日々その脅威を増し、人間の自由と平和を求める思想が抹殺され続ける日本に生きる友の運命を案ずればこそ、高田はその日本の「誰か」から託された「訴え」をロマン・ロランに委ねたのだ。その「誰か」の願いは1932年9月29日の「ユマニテ」紙面で叶えられ

たのだが、その事実の知らせが日本に届けられることはなかった。その後半年を経ずして小林多喜二が同じ思想的迫害の犠牲者となる。その死の報を得た時の高田のうちでは、おそらくは日本から遠く離れたフランスにあればこそ、小林多喜二という大きな名をもった死の重みも、191 という数字の中に紛れて名を知られぬ個人の死の重みも、「同じ重さで対比」していたに違いない。そしていつしかそれらは、同じ一つの思想に対して同じ権力から加えられた暴虐の記憶として高田の中で同一化していったのだろう。

もう一つ、さしあたりは実証する手掛かりがないから私の空想にとどめておくべきかもしれないが、ここに加えたいことがある。先に私は「ユマニテ」の多喜二追悼記事（1933 年 3 月 14 日）について、「この記事は、多喜二の出生にまで触れており、この当時のフランス人記者の手になるものとは信じがたいほど詳細正確なものである」という印象を述べたが、確かにこの記事は、海外特派員からの報告を伝えただけのものではなく、明らかにフランス国内で得られた情報に基づいて書かれたものである。そしてこの詳細正確な情報を提供できる日本人がいたとしたら、それは当時「ユマニテ」やフランス共産党の人間と最も近い関係を持っていた高田博厚その人ではなかっただろうか。もしもこの想像が当たっていれば、後年の高田の「記憶の錯誤」はさらに一層自然の成り行きだったろうと理解できるのである。

* * * * *

1985 年に刊行された『高田博厚著作集』（朝日新聞社刊、全 4 巻）第 1 巻の解説の中で加藤周一氏は、「この本のなかには、また、突然不意をついてあらわれる美しい場面、高田さんの人間の質を啓示するだろう素晴らしい挿話がある」（468 ページ）と述べ、次の 1 節を引用している。

彼女は大きな^{タッス}茶碗に熱い牛乳入りのカフェを一杯満たして、^{クロワッサン}月形パン
と共に朝^{ブティ・デジュネ}食を用意してくれた。徹夜の酒で頭の奥がじんじんし、手が

ふるえて、むさぼり食う私を、彼女はだまって眺めていた。「あなた、どうしてそんな馬鹿をなさるの？ 理由もないのに……」つぶやくように言った。急に涙がこぼれそうになったので、私は茶碗をそっと卓に置き、だまって彼女の手をとった。私の悲しみは彼女には言えない。私はこの若い美しい女をクラマールに移ると同時に愛していたのであった。行く先のない愛情であることを知りながら。そうして私には、スイスでのガンディーやロランとの一週間と、彼女のところでの朝食が、今日でも同じ重さで対比している。

そして、その最後の1文だけですでに見事な文学作品であり、「その1行には、一人の人間のもっとも深く、もっとも美しい部分が、要約されている」と絶賛している。実はこの引用は『分水嶺』からのものであり（文庫版130ページ）、加藤氏がさりげなく「この本」と呼んでいる著作集第1巻には収められていないのである。にもかかわらずここで敢えて引用するほど加藤氏は『分水嶺』の文章を愛し、こだわりを見せている。そして、にもかかわらず氏は、当然承知しているはずの高田の多喜二への言及については一言も触れていない。

著作集で『分水嶺』が収められたのは第2巻であり、その解説を記した中村雄二郎氏は、回想録的な文章においては「書き手本人の無意識的、半意識的な〈事実〉からのずれがどうしても入らざるをえない」と述べ、いささか歯切れ悪く「〈事実〉と〈真実〉とを区別すること」を主張し（479ページ）、そのうえで、『分水嶺』の中に書かれた嬉野満州雄のフランス国外追放をめぐる高田の記憶違いには言及しても、一般人の目にははるかに大きな記憶違いと見える多喜二とロマン・ロランをめぐる記述（そこには嬉野との出会いも絡んでいる）の誤りには触れていない。さらには、ずっと後年（2000年）の岩波現代文庫版の解説者である粟津則雄氏もこの点には全く触れることはなかった。

今にしてわかる、これらのすぐれた読者・識者がなぜこの1点だけには触

れようとしなかったのかが。この1点こそは、高田を深く愛し、理解したはずの多くの人々にとって躓きの石となっていたのだ。高田の胸の内以外にはもはやどこにもその真偽を明かす手がかりはないと思われてきたこの多喜二／ロマン・ロラン伝説に手を触れれば、明らかな根拠もなく自らが深く敬愛する人を裏切り貶めてしまいかねないことを恐れたに違いない。その通りなのである。だがしかし、今その躓きの石は跡形もなく取り除かれたことを断言できるのである。

そして最後に一言付け加えよう。1933年に小林多喜二の死を悼んでロマン・ロランが記した追悼文が存在するという伝説が生まれたのは、ロマン・ロランを精神の師と仰ぎ続け、小林多喜二ともその思想を共有し得た、高田博厚という20世紀の日本を代表する傑出した知性の羨むべき広く深い経験の中に生じた一つの記憶の錯誤からであった。そしてその記憶の錯誤には必然的ともいえる理由があったのだ。その事実が解き明かされた今、われわれが知るのは、——ここでこそ再度中村雄二郎氏の言葉を借りよう——多喜二／ロマン・ロラン伝説をめぐって〈事実〉と〈真実〉の間に不可避的に生まれるずれを検証し続けた果てに、〈真実〉は常に高田の心の中にあったのだという、この上なく喜ばしい一事なのである。

注

- 1 これは—— *on s'en souvient* —— という挿入句を仮にこう訳したのだが、この記事を単独で発表するときには不可解な印象を与えるため、「言語センター広報」掲載時には省略した。しかし今回の検証においてはこの1句もまた重要な意味をもっている。
- 2 引用に用いたのは岩波現代文庫版(2000年)であり、ページ数はこれによっている。
- 3 『分水嶺』は1974年から1975年にかけて雑誌『世界』に連載されたものであり、その後単行本にまとめられたときに、上記引用部分にある括弧部のくだりが書き加えられた。

「無産者新聞」は大衆的な政治新聞を謳って1925年9月に創刊された週刊新聞で、正式な機関紙である「赤旗」[せっき]が1928年2月に創刊されるまでは戦前日本共産党の機関紙の役割を果たした。1929年8月に発禁処分が確定し、同月

- 第 286 号をもって廃刊した。ここで付け加えておくと、上記引用の「赤旗」[あかはた] 1974 年 2 月 20 日号の写真中に見られる「無産者新聞」という名も誤りで、「赤旗」[せっき] とされるべきところである。
- 4 Paul Signac (1863/11/11-1935/08/15)。19-20 世紀のフランスの画家。ジョルジュ・スーラと並ぶ新印象派の画家。フランス共産党シンパの芸術家で、その展覧会の記事が「ユマニテ」に掲載されることもある。
 - 5 加藤哲郎「ベルリン反帝グループと新明正道日記」<http://homepage3.nifty.com/katote/SHINMEI.html> (『新明社会学研究』第 5 号, 1995, 新明正道『ドイツ留学日記』1997, 時潮社, 所収)
 - 6 A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) は世界革命作家同盟のフランス支部に当たる。同盟のハリコフ大会(1930 年 11 月)の決議に従って、フランスでは機関誌として「コムューヌ」が創られたが、創刊号は 1933 年 7 月に出て 1939 年 7 月まで続いた。したがって多喜二が死んだときには、迫りくるドイツファシズムに対抗する作家・芸術家の文化防衛闘争を謳うこの雑誌はまだ存在していなかった。
 - 7 *Feuille Rouge* が「ユマニテ」紙面に登場するのはこれが最初である。この語は通常は紅葉の葉を意味し、直訳すれば「赤紙」となるが、いずれもふさわしくない。Henri Béhar 著の『アンドレ・ブルトン伝』邦訳(思潮社, 1997 年)では「赤い冊子」と訳されているが(296 ページ)、現物は 2 色刷り両面印刷の一葉で不定期発行の号外新聞である。*Feuille Rouge* には発行の日付が記されていない。この第 1 号の発行の日付については、3 月 6 日の「ユマニテ」紙面の文言として、「この抗議文はすべての新聞社とドイツ大使館に届けられる。明日になれば、これに対する答えが沈黙としてか、騒ぎとしてか、いずれかで返ってこよう云々」とあることから、当日か前日、つまり 3 月 6 日か、1 日さかのぼって 3 月 5 日と考えられる。ついでながら、『アンドレ・ブルトン伝』では創刊号は 2 月 8 日とされているが、これは誤りである。なを、B. N. F. フランス国立図書館に保管されている *Feuille Rouge* は 1 号から 6 号までであり、うち第 5 号は欠落している。
 - 8 ナチスドイツ親衛隊の制服の色から生まれた表現。ナチスの暴力的支配をペストの猛威に例えている。
 - 9 従来ペストは「黒死病」と称される。ここでは「黒シャツ隊」と呼ばれたイタリアファシスト党武装行動隊に重ねてイタリアファシズムを象徴している。
 - 10 1933 年 2 月のドイツ国会議事堂火災。ナチスは коммуニストの犯行と断じて弾圧の口実にした。
 - 11 荻野富士夫氏のご指摘によれば、ここで「解体」と呼ばれているのは、時期的にみれば 1932 年 3 月以降にコップに加えられた大弾圧(そのため多喜二はこれを逃れて地下潜伏することになる)を指すはずで、実際の解体は 34 年 4 月頃となる。
 - 12 この記事が掲載された同じ紙面の左側には《Protestez!》と題する記事が掲載されている。この抗議文の署名者には、A. E. A. R. 創設者であるポール・ヴァイヤン＝クチュリエは無論のこと、ロマン・ロラン、アンリ・バルビュス以外にも、シュルレアリストのアンドレ・ブルトン、ルイ・アラゴン、ポール・エリュアール、バンジャマン・ペレ、さらにポール・ニザンその他 30 名を超す作家が名を連ねており、20 世紀仏文学史上の重要な歴史的資料となっている。Cf. José Pierre (éd.) *Tracts surréalistes et déclarations collectives*, tome 1, éd. Eric Losfeld, 1980. この抗議文の存在はつとに知られていたはずであるが、同じ紙面に多喜二

虐殺抗議の記事があることに気づかれなかったのは、*Feuille Rouge* の現物を参照する機会に恵まれなかったからであろう。

- 13 この人物については詳細不明だが、1946 年に詩集 *Le Regret de Paris* で Deux Magots 賞を受賞している。
- 14 「ユマニテ」1932 年 7 月 19 日第 4 面の広告だが、翌日 [集会当日] の「ユマニテ」第 2 面にも同内容の広告がある。
- 15 本論末尾の付録の「赤旗」[せっき] 当該記事参照。
- 16 ここで言われる日中戦争がいわゆる日華事変 (1937 年 - 1945 年) でないのは明らかである。おそらく、1928 年に日中両国軍隊が衝突を起こし事件がきっかけとなった済南事件を指すと考えべきである。
- 17 「ユマニテ」の現物では、日付が *Le 20 juillet 1922* となっているが、これは明らかに印刷上のミスであり、*Le 20 juillet 1932* が正しい。
- 18 「同志小林多喜二の虐殺と大衆的抗議のための特輯号」である 1933 年 2 月 28 日発行のこの「赤旗」[せっき] 122 号に、問題となる多喜二の遺骸の写真が掲載されている。